

# 芥川だより

発行日 \* 2024年5月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
発行人 下村嘉明  
〒661-0951  
尼崎市田能5-3-10-601  
☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## 少子高齢化・円安・低い投票率が日本を滅ぼす

最近の円安には腹が立つ、いずれ物価高を招く。少子高齢化は手の打ちようがない。政治的な無関心さも極まった感じだ。時間がたてば解決する問題ではない。多国籍企業はホクホクだろう、円安でも円高でも収益が上がるシステムだから、たとえ日本の社会がガタガタになっても生きていける。

多国籍企業や輸出関連企業で働く人たちは、裕福な生活ができるが、そうでない多くの日本人は、これから落日の日本で生活しなければならないだろう。これはかなり面白くない生活だ。人口が増えるから活気が出るし希望も湧いてくる。ジジババばかりが増えて子供らの姿が見られなくなるという社会は夢も希望もない世界だ。若者の多くは外国へ出稼ぎに行き、残された老人たちは介護も受けられなくなる。

日本での格差は一段と広がり、高額な有料老人ホームで優雅に過ごせる一部の老人たちを除けば、老々介護でやらざるをえない。医療など福祉関係の予算も人員も少なくなるのだから仕方がない。日本も繁栄したい時があったんだから仕方がないとあきらめるか…。もう過ぎし日の事をいくら夢見ても、見果てぬ夢だ。

最後の頼みは政治だが、日本の政治的な関心度は非常に低い、唯一政治への参加である投票にすら多くの人は行かない。しかし、こんな状況はいつまでもは続かない。人々の生活が困窮し手の打ちようがない時になれば、人々は、争ってこれからの社会のありようを考えだす。もう誰も助けてくれない自分たちの明日を真剣に考えだす。確かなことは言えないが、およそ半世紀50年後までは悲観論が主流となり50年を過ぎれば開き直った楽観論が主流になるだろう。そのためには、老人たちが若い人達へ生きていく知恵を教え続けないと、日本は消えていく運命だと思う。老人たちの責任は重い。

死をめぐるあれやこれ(113) 石川 吾郎

### ギャンブル依存症と報道

米国大リーグの大谷選手のニュースがこの一月ほど報道をにぎわした。大谷選手自身の大活躍は大きな楽しみだが、話題の多くは元通訳の水原氏の犯罪行為の件。水原氏の通訳ぶり、そのサポートや気遣いは非常に評価が高かった。彼がいなければこれほど大谷選手がスムーズに米野球界に溶け込むことは困難だったろう。しかし事態は今年三月シーズンの始め、一夜にして変わった。彼が大谷選手の銀行口座から莫大な金を勝手に引き出し、賭博に使っていたのが明らかにされた。自分がギャンブル依存症であることをチームと球団に告白して謝罪したという。このショッキングな事情は、日本のみならず米国でも一般の大きな関心を呼んだようだ。

◆日本のメディアも極めて大きく取り上げた。私はかなり注意してこのニュースを見てきたが、日本の大手メディアの報道が、不自然に避け続ける論点があることに気づいた。それはまずギャンブル依存症の怖さである。大谷選手の絶大な信頼を受けながら、違法賭博に大谷選手の莫大な口座から勝手に何十億という巨額な金を引き出し、賭けること何千回にも及んだというらしい。水原氏にとって人生の破壊への転落であり、彼の人生のやり直しは厳しいものになる。◆水原氏の経過は、ギャンブル依存症の典型的な例といえる。賭けに負けて、それを取り戻

おくべきであろう。なお、これを書いてみると、日本の今年の報道の自由度が世界の六八位から七十位に後退したというニュースが入ってきた。

芥川だより二〇八号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム113	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 122	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談72	祖蔵哲	3
大峰奥駈道78	下村嘉明	5
ボケ老人の雑話	明石幸次郎	5
オクラの山たより 92	囚了生	6
隠された歴史67	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草71	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (122)

坂本一光

◆人間をうたうと人間らしくなる

人間などと大げさに言わなくても、「わたくしをうたうとわたくしらしくなる」。それだけのことである。何時の頃から、啄木の歌を読みながら、

啄木の歌は

百年超えてなお  
我は私と私に届く

そう思ったことがあった。

始めは、啄木のたとえば、

東海の小島の磯の白砂に  
我泣きぬれて  
蟹とたはむる

こんな叙情歌に反発しながらもどこか魅かれていただけであった。そのうち、三十五になっても就職が決まらない頃、

こころよく  
我にはたらく仕事あれ  
それを仕遂げて死なむと思ふ

こんな歌も詠んでいたのかとグツときた。さらに、明治も終る頃、伊藤博文暗殺、韓国併合、大逆事件へと時代が向かう中で啄木が世の中に目を向けて詠んだ数々の歌に出会った。

一隊の兵を見送りに  
かなしかり  
何ぞ彼等のうれひ無げなる

赤紙の表紙手擦れし  
国禁の  
書読みふけり夏の夜を寝ず

誰そ我に  
ピストルにても撃てよかし  
伊藤のごとく死にて見せなむ

地図の上朝鮮国にくろぐろと  
墨をぬりつつ秋風を聴く

秋の風我等明治の青年の  
危機をかなしむ顔なでて吹く

かくして私をうたう心は、世界をうたう心と一体となることがある。その時、私をうたう者は、「私を見る者は世界を見るだろう」という意味で「人間らしくなる」のだと思えた。それにしても、である。明治が終わって百年が過ぎた現在の日本に吹いている風は、青年の頬を、老若男女の頬をどのように撫でているのだろう。

そんなことを考えていたら、昨年七月六日付の大分合同新聞コラム『東西南北』の切り抜きが出てきた。コロナ禍の中の短歌に触れたエッセイである。

「この味がいいね」と

君が言ったから

そうとさらに多額を賭けて負ける。これを果てしなく繰り返して自分では止められなくなり、ついには犯罪に手を染めてしまう。◆ギャンブル依存症は「立派な」精神的な病気である。しかも人生に破滅的な影響を及ぼす重大な病気であり、その治療は極めて難しい。効果のある薬剤があるわけではなく、長期間のリハビリが必要になる。このギャンブル依存症の怖さについて、日本の主要なメディアがあまり語ろうとしないことがまず疑問だった。◆そして最大の疑問は容易に連想されるように、ギャンブル依存症を大量に作り出すだろうカジノつきのIRを大阪万博の跡地に作る事が決まっていることに言及する大手メディアがほとんどないことだ。NHKテレビでも、ニュース解説の番組でこの事件を取り上げたがギャンブル依存症の恐ろしさと、万博跡地に予定されるIRの建設には、一言の言及もしなかった。◆このような大手メディアの姿勢の背後には、何か大きな力が働いているとしか考えようがない。カジノができてしまえば、今後日本に小型の水谷氏を何万と作り出していく。これはIR建設に前のめりになっている自治体として大阪府と大阪市とそれをコントロールしている維新の力以外には考えにくい。その圧力は直接でなくとも、メディアが「忖度」した結果であるだろう。我が国のメディアの状況は、かくも劣化していることは、国民すべてが認識して

七月六日はサラダ記念日 俵万智

古めかしい印象を持たれがちな短歌に口語と身近な品々をちりばめた現代表現が人気を集めた。歌集は一九八七年度のベストセラーランキング第1位になり、昭和の終わりに短歌ブームを巻き起こした。令和の今またブームに沸く。きっかけはコロナ禍が指摘される。他者との関係を絶たれ、閉ざされた世界にこもる中で自分を見つめ直す時間が増えたためだという。もう一つはSNSの普及。「いいね」の共感が自他を励ます。オンラインで盛んな交流が続く。歌が心をつなぐ。

「いいね」の元祖とも呼べる俵さんは著書『短歌のレシビ』で「短歌という短い詩型が得意とすることの一つは、ささやかな日常のなかの、小さな感動をすくうこと」と述べている。身の回りの物事に感じたことを平易な口調で、三十一文字の型にはめて発信する。表現する苦楽はサラダの上のトマトだ。生活に彩りを添える。

現代歌人協会編『続コロナ禍歌集2021年〜2022年』には秀歌が集められているが、中でも気に入った作品を一首。

せめてもの口紅だけが武器だった

コロナ禍のわれ丸腰で(いびる)

高橋美香子(東京都)

乙女心と侍言葉のコラボに諧謔味あり。

万事において、刀なくとも立ち向かう武士(もののふ)でありたい。(1)

エッセイの最後の一行に、心からの拍手を送る。

岸田さん、「日本は米国とのグローバル・パートナーである」、「米国は独りではない。日本は米国と共にある」、そんな日本にして、我らをどこへ連れて行くつもりですか。非核・平和の日本じゃないのですか。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

## 「哲学爺い」の時事放談(72)

祖蔵 哲

6年目記念「哲学しない爺い」

このコラムも今回で72号、ということとは丸6年続いている。気づけば遠くへ来たものだ。もう息切れがしそうだが、頑張ろう。皆様に甘えて今号は休養をいただくつもりで、極端に短い断片集で。日本ではなぜかあまり報道されないニュースを中心に“つぶやく”だけ。まったく哲学しない。やはり哲学は疲れるのだ。

(1) 戦争の世紀はつづく

今月も引き続き、きな臭い「時事から始まる。先月初め4月3日、イスラエルがシリアにあるイラン大使館を空爆という驚きのニュースが入ってきた。「外交関係にかんするウィーン条約」は、外国の大使館や領事館の「不可侵」の治外法権を認めている。これは世界の常識である。これを受けて国連は安保理招集したが理事会は紛糾したが、例によって大国のダブルスタンダードによって拒否された。

この後の8日から日本の岸田首相は訪米し、11日に米議会で「日本は米国と共にある」と演説した。相変わらずの対米従属で、これは間接的に不法なイスラエルの行為を追認するものになった。そしてこの混乱に乗じて自衛隊と在日米軍の指揮・統制枠組みの見直しを推進することを確約した。平和憲法の理念からすると大幅かつ具体的な政策転換である。そして14日になると、イランがイスラエルに報復攻撃、イランは「自衛権に基づく攻撃」と主張した。イランがイスラエル領内に直接攻撃するのは初めてだ。しかし、これまたイスラエルと同じ論理「自衛権の行使」を盾にとっている。これは全くの推測であるが、今回のイスラエルの不可解な行動の意図は、世界の関心をイスラエル国外に外すことにあるかもしれない。そうだとしたらこれらの行動は戦争を外交の手段に使う卑劣な方法である。もつともこの言葉は2世紀以上前の

プロイセン、クラウゼヴィッツが、戦争を「政治目的を實現させるための手段」と定義している。戦争とは政治の延長であり、相手に自分の意思を強要するための暴力行為。まさしく現代も戦争が政治の手段になっている。

(2) 密かに巻き込まれる軍事同盟

クアッド(QUAD)とオーカス(AUKUS)。存じであろうか。あまり集中して報道されないし日本国民も関心が薄い。しかし、先の首相、アメリカ訪問での日米軍事同盟での重要な事柄である。「クアッド」は、日本、米国、豪州、印度の四か国の首脳や外相らが安全保障や経済を協議する枠組みで、英語で「4つ」を意味する「quad」という通称が定着したもの。「自由」や「民主主義」、「法の支配」といった都合よく一方的に普遍性を定義した言葉で対中国をけん制し、インド太平洋地域での協力を確認する場がクアッドである。そのためにオーストラリアへの原子力潜水艦の配備を検討している。日本の役割は、量子コンピュータ、超高速機、人工知能、サイバー技術などさまざまな分野における先進能力と技術共有だ。もう一つの「オーカス」は、「Australia」「United Kingdom」「United States」の頭文字をとったもので、豪州、英国、それに米国という3国間の軍事同盟である。二つの対中国軍事同盟に共通する国はもちろん

アメリカ。これらの軍事同盟に日本が本格的に組み込まれて行くのだ。それに今回、日米が合意した、米国、在日米軍の機能強化へ指揮統制見直し。具体的には今年度末に米軍と自衛隊とが連携する統合任務部隊が東京に設置される。有事にはここから直接現場起動軍に指示が出されるという。果たして自衛隊の文民統制は守られるのか。「有事」「自衛権」のもと軍隊が暴走する危険は現代でも数限りなく行われている。

### (c) BDS運動

これも日本ではあまり報道されないが、昨年10月にイスラエルとハマスの武力衝突が発生した後、イスラエルのマクドナルドは同国の兵士に無料で食事を提供すると発表した。これを受けて世界の国々はマクドナルドへの бойкот運動を展開した。経緯は異なるがスターバックスや運動具メーカーのピューマも対象になっている。

BDS、この言葉をどう存じであろうか。

「不買 (Boycott)、投資撤回 (Divestment)、制裁 (Sanctions)」の頭文字をとっての BDS 運動は、イスラエルに対し、国際法に違反するとみられる行為を中止させるための政治的・経済的圧力の形成と増強を目的としたグローバルなキャンペーンである。この運動は今回が初めてではなくすでに2005年から始まっている。目標は、イスラエル

によって、パレスチナ人の領土(ヨルダン川西岸地区とガザ地区)およびゴラン高原において行われている占領と入植活動の終結と、イスラエル・アラブの差別解消、さらにパレスチナ難民の帰還権の承認である。

日本でもあまり報道されないのは、スポンサーに気を使って自粛、忖度しているのだろうか。報道の自由度が世界最低ランクグループに属する日本の不自由は変わらない。

### (4) アメリカ大学学生運動

このニュースもあまり日本で報道されないが、これも昨年10月にイスラム組織ハマスがイスラエルを襲撃し、イスラエルが報復攻撃を開始して以降、アメリカの学生たちはデモ行進や座り込み、ハンガーストライキ、野営などで、この戦争に抗議してきた。学生たちは所属大学に対し、多額の大学基金などによるイスラエルへの投資から資金を引き揚げるよう要求している。

この騒動を受けて当該大学の学長がその対応を問われ米連邦議会下院公聴会にかけられた。この公聴会で問われたのは「ユダヤ人のジェノサイドを呼びかけることは、あなた方の大学では、いじめや嫌がらせを禁止する学則違反に該当するか」というものである。つまり大学は「反ユダヤ主義」を放任するのかという問題だ。その場で学長たちは「文脈による」

と発言し、これがアメリカ国内で波紋を巻き起こした。ハーヴァード大学の学長は発言を謝罪し、ペンシルヴェニア大学の学長は辞任した。その後、各大学は学生運動に対して強硬な態度をとり、警察を導入して強制排除、学生の逮捕に乗り出した。これを受けてトランプは「警察はよくやっている」と高評価しているほどである。

日本の大学こうなろうとしているが、アメリカでの大学の基金は、研究室から奨学金基金に至るまで、あらゆるものに寄付金が充てられていく。そして大学自身も投資によって利益を得る。これらに欠かせないのがユダヤ人経済団体である。この仕組みに対して学生たちがイスラエル関連の投資引き揚げを要求したのだから、大学にとっては重大な問題であった。

### (5) 反セム主義、反イスラエル

イスラエルを批判すると「反ユダヤ主義」だと指摘される。歴史的にはいわゆるディアスポラ、ユダヤ人の離散と迫害から始まる。そしてヒトラーによるホロコーストの苦難を経て、欧州から逃れたユダヤ人が米国で成功し、各界で発言力を高めてきたことがある。そしてイスラエルの建国。ユダヤ人の影響力が強く、ユダヤ人の問題に敏感な米国でイスラエルを公然と批判すれば、強いバッシングを受けられる恐れがある。イスラエル批判は、ともすれば「反ユダヤ主義」と決めつけ

られて、先ほどの BDS 運動とは逆の不買運動や選挙での落選運動の標的にされるなど、大きなリスクが伴う行為とされてきた。「反ユダヤ主義」と見られるのを恐れるあまり、イスラエル批判に及び腰になってしまう。逆の言い方をすれば、「反ユダヤ主義」というレッテルをちらつかせることで、イスラエル批判を封じ込めてきた側面もある。

このようなアメリカで、最近徐々にイスラエル批判が出るようになってきている。背景にあるのが、米国内のムスリム系人口の増加である。現在、ムスリム系はユダヤ系の人口の半分強だが、2020年には追い抜くとみられる。相対的にムスリム系の発言力が高まっている。さらに、アメリカ若年層のイスラエル、ユダヤ社会離れというものも関係する。昨年10月のハマスのテロ攻撃の当初に強くあつたイスラエルへの同情心も変わってきた。確かにハマスの攻撃は一方的なものだったが、その後のイスラエルの反撃では何十倍もの犠牲者が出ている。ロシアがウクライナで行っている「力による一方的な現状変更」と同じことを、ガザではイスラエルがやっているのではないか、それはおかしい、「ダブルスタンダードだ。」と感じる人が増えてきたのであろう。

さて以上、今月は全く「哲学なし」である。ただ事実と感想を並べただけ。まったく楽だ。あえて今号の内容を哲学し

たならば「世界宗教とは何か」となるのか。宗教もイデオロギーもローカルから世界に広がると排他的、独善的になる。また今後このテーマで哲学をしてみよう。

## 大峯奥駈道(78)

下村 嘉明

体験型人間学 28

腰が曲がり、立ち姿がいかにも爺様、杖の代わりに赤い誘導棒を腰にぶら下げて動かない姿を見ていると、何とも言えない感情がこみあげてくる。彼は、79歳、半年前にこの仕事を始めたという。奥さんがなくなり、家にいてもすることがなく警備員の広告を見て決めたという。娘や息子は反対するが、家にいても面白くない。話す相手もなく一日中一度も話さない。働きに出れば、あいさつなど話す機会が増える。

周りの同僚には、何かと迷惑をかけるが、それでも家にいるよりマシだという。彼は、中学を出て丁稚奉公に出て地元のお店で働き後に独立し自営業を70歳ころまでやり、奥さんが病に倒れて店をたたみ介護してきたのだろう。ひとりになつて、暇なので図書館へいき本を読む

が、一向に面白くなく、一日誰とも話さない日が続くと、ボケてしまいそうになる。これではいかんと思ひ、働きたした。しかし、長時間の立ち仕事はつらいという。彼の姿を見ていると、本当に虚しさとおんげしたい複雑な気持ちになる。

今は、元氣な私も、必ず腰が曲がり、歩くのもおぼつかない姿になる。周りの同僚や作業員から半分バカにされ嫌がられても仕事を続ける自分があるかもしれない。多くの年老いた警備員を見るたびに、私は、自戒を込めて老人たちを小ばかにする自分の心を抑える。

## ボケ老人の雑記(その1)

明石 幸次郎

老人にとって幸せな日々とは、何か？それは、昨日あつた平穩な日々が今日も、明日も又、続き機嫌よく過こせることですか。

天氣の良い日には、自宅から歩いて20分ほどにある万博記念公園に昼過ぎに缶ビール、つまみ、水、シート、折りたたみ椅子、本かスケッチブックをザックに入れて、スマホを聞きながら出かけることを習慣としています。

平日の万博記念公園は午後2時を過ぎれば、人もまばらで、日々変わる季節の花、木々の色、空氣、空の色、雲の形を見ながら1時間程園内を歩いて、指定のマイスポットでシートを敷いて、折りたたみ椅子を出して休憩します。徐に缶ビールか、寒い時はホットウイスキーを飲みながら、時には読みかけの本を読んだり、気が向けばスケッチをしたりしながら過こします。

缶ビールを飲み干すと、段々と眠くなりますので、シートの上で寝転び、ザックを枕にうとうとしながら昼寝をします。この野外での昼寝は老人にお勧めです。10分か長くて20分程で目が覚めますが家での昼寝とは又違った、起きた後の何とも言えぬひとりよがりの爽快感が味わえます。

昼寝の後、4時頃に10分程移動して日本庭園の中にある休憩所に行きます。その売店で、閑にしているおばちゃんにコーヒーを注文して、誰もいないベンチでコーヒーを飲みながら又、本の続きを読みます。暫くしてから、5時10分前になると園内放送がかかり「5時になると閉園になりますので帰りの支度をして下さい」と夕焼け小焼けで日が暮れて、山のお寺の鐘が鳴る——の音楽と共に帰りを急がせます。売店のおばちゃんもかたづけにかかります。

小心の私はこの放送と共にすぐに売店のカウンターにコーヒカップを持って行

くためにベンチから立ち上がりますが、閉園の放送を気にもかけずに大きな声で喋っているのは、大抵はおばちゃんのグループ連れです。周りと時間を関係なくお喋りをしています。それは、私が今しがたしてきた昼寝と同様にお喋り、雑談は心身のストレス解消の効果があると確信していますが、精神医学的にはどうなんでしょうか？周りの人に迷惑を及ぼさない程度のおしゃべりは、大いにやっても良いと思いますが、園内で何人かのグループ連れで歩きながら大きな声でお喋りしているのは大抵は中高年の女性連れです。中高年の男性で多いのは、一眼レフカメラを抱えてザックをしょった単独行です。真剣なまなざしでよい写真を撮るという目的で園内を歩いているので、近寄りたいたい雰囲気を出しています。よい写真を撮るといった純粹な目的で歩きまわっています。私のような散歩を兼ねてビールを飲み、呑んだ後は昼寝をする、そして又、ぼつと散歩すると言った単独行の人には、今まで会っていませんのでレアケースには違いありません。

しかし、多分、何人かの老人男性で昼寝はともかく、単独で広い園内のどこか自分だけのマイスポットでアルコールを飲みながら本を読んで、自分だけの楽しみを見つけに来ている私のような輩はいらぬと思ひます。その輩の最低のマナーは家人とか園内の周りの人には迷惑をかけずに、心身共に健康を維持しようとする

同志であると勝手に思っています。因みに家から往復40分、万博記念公園ないで1時間20分歩き、2時間で約2万歩くらい歩いたことになりません。私の先輩に毎日15キロ歩いていることを誇っている老人がいますが、何か歩くことだけを目的にしているだけに感じて余り共感はありません。老人は歩くのにも年寄りなりの、歩くだけを目的にしない、もっと豊かで、面白みを感じるような歩き方？があるのではないかと意識して、それで、「呑み鉄」ではなく、年金老人に相応しい公園での「呑み散歩」を考え、日々機嫌よく実践している次第です。

## オクラの山たより (92)

因了生

一

今回は一茶の俳句からは少し離れて一茶の生まれ故郷である柏原におきた北信濃を揺り動かした訴訟事件についてあれこれです。

この事件は一茶がまだ江戸にいた文化年間のはじめから始まり最終的な裁断がおりたのは一八一三（文化十）年のこと

でした。この年の一月二十六日、一茶は明専寺住職の調停で義弟の専六と「熟談書付之事」をとりかわして遺産相続問題は一応の決着をむかえ、一茶は故郷柏原に定住することを決意しました。翌年四月、一茶は二十八歳の菊を妻に迎え「五十婿（ごじゅうむす）天窓（あたま）をかくす扇かな」と句に詠み、恥ずかしくもうれしい気持ちを率直に表現しています。

おおよそですが、これから述べる訴訟事件は一茶が江戸の暮しを切り上げて帰郷しようとしてあれやこれやと動き出し、それを何とか達成する時期と重なっています。

訴訟事件の舞台は北信濃と江戸。ことのおこりは北国街道に幕府の命令で置かれた「伝馬」制度にありました。

二

幕府は東海道をはじめとして主要な街道に公用の旅行者や物資を宿場から宿場へと運ぶために宿場ごとに馬を用意させ、宿継ぎ（宿場から宿場へとリレーのように旅人や荷物を運んでいくこと）という制度を作りました。もちろん馬だけでなく荷駄を運ぶに必要な人足の動員も「伝馬」のなかに含まれます。

一茶の故郷である柏原は北国街道の中で伝馬御用をつとめる宿場、つまり幕府から御伝馬宿に指定された宿駅の一つでした。もちろん公用とされた伝馬御用は

無賃の人馬の提供でしたので、それをつとめるにはかなりの負担が伝馬宿には生じました。そのため伝馬宿にはその郷にかかった年貢諸役は免除されました。伝馬宿とする代わりに柏原宿では宿場にあらる屋敷の検地高（今の敷地面積です）十三石二斗の年貢二石六斗四升を免除するというお墨付きが六一一（慶長十六）

年九月十日に御伝馬宿柏原に対して出されています。柏原村全体で二石六斗四升の年貢の免除はたいした恩恵はありませんでした。しかし、御伝馬宿と公式に認められたことは北国街道の人馬の通行、商品荷物の流通輸送に重大な特権を柏原宿は付与されたことを意味していました。まず、このお墨付きによって北国街道を利用する旅行者、運送される民間の物資はすべて柏原宿を通過しなければならぬという特権が与えられたことです。このため一七八一（天明元）年には御伝馬の御用をつとめる六十九戸のうち二十二戸が旅籠を営業していることとなりました。お墨付きの効果はそれだけではありません。

御伝馬宿では公用の馬御用は無賃でしたが、商品荷物の輸送では伝馬宿で馬を替えるとされ荷物も同時に付け替えるということをしなくてはなりません。そして伝馬宿では荷物を輸送する商人たちは荷物付け替えの手数料、口銭（こうせん）といいました。北国街道は越後国をはじめとした日本海側の国々と江戸と

を結ぶ北国街道は塩をはじめとして生活必需品を運ぶ重要な流通のルートです。この口銭は柏原宿に多くの富をもたらしました。

三

六一一（慶長十六）年に北国街道の伝馬の宿駅としてお墨付きを頂戴してから柏原宿には二十五人の人足、二五疋ひきの馬を常備し、公用とあれば人馬を無償で提供して次の宿まで送り届けることが原則となりました。もちろん物資の流通の増加などによって馬の数は徐々に増え一八二七（文政十）年には柏原宿全体の馬の総数は七十八匹となっていました。

最大の公務は佐渡の金銀の輸送と北陸の大名でしたが、とりわけ大変だったのは加賀藩百万石前田家の参勤交代の通行でした。佐渡から江戸への金銀の輸送は春と秋の二回厳重な警戒態勢のもとで行われました。必要とされた馬は六十疋。これは柏原宿だけで何とかできたようでしたが、加賀藩の通行は大変でした。前田家の金沢・江戸の往復の通行には馬三百六十疋、人足百人を必要としました。このためにはもちろん近郷近在から人馬を徴発して対応せざるを得ませんでした。参勤交代の大名行列は公用とされず、いくらかの金銭が宿駅から請求されました。たとえば、一八〇二（享和二年）、



柏原宿本陣の中村六左衛門が加賀藩に金七十両を請求した記録が残っています。

これは江戸に向う分だけであり、翌年には帰国に際して馬一疋については金一両（現在の十万円ほど）、人足一人については銭二千九百文（現在の四万五千円ほど）を六左衛門は加賀藩に請求しています。

一六一一（慶長十六）年に出されたお墨付きは大きな負担をかけるものでしたが、同時にそれを埋め合わせるだけの利益を柏原宿にもたらしていたのです。

伝馬の制度は伝馬の宿として指定された宿駅には一定の利益をもたらしましたが、それ以外の村落で物資輸送を担っている人々には輸送経費などで頭の痛い問題でした。

公道である北国街道は「宿継ぎ」を原則とします。つまり、宿駅毎に馬を付け替え、荷物を積み直さねばなりません。そのため日時が無駄に費やされ、荷物が痛みやすくなります。おまけに付け替えの手数料である口銭も徴収されます。この「宿継ぎ」に対抗したのが「付通し」です。目的地まで同じ牛馬で輸送するため迅速で荷物の積み替えがないので荷物の傷みが少ないという利点がありました。

こうした利点から公道である北国街道を避けて塩、銚鉄、生魚、塩肴等の商品を越後国から信濃各地や上州方面に運ぶ人々（特に柏原宿以南の村落で流通で稼

ぐ人々）が増えていきました。

川東道は柏原宿の北にある野尻宿から東にそれて柏原を通ることなく北信濃の水内郡、高井郡の村々を南下して善光寺、上州方面へと通じるルートです。公道ではありませんが北信濃の流通の大動脈とあってよい働きをしていました。この道を通れば口銭の負担などはなくなりま

す。当然、この川東道を物資輸送に使う人々を増えていきます。しかし、拡大を続ける塩荷を筆頭に商品荷物の流通市場の大半を川東道に奪われることは、多少の年貢免除があつたにしても無賃の公用人馬の常備を義務づけられていた柏原宿にとっては生き死にに関わる重大事でした。

こうした中で一八〇五（文化二）年六月十七日、川東道を野尻宿から少し南に行つたところにある舟岳村で事件が起こります。

上州国境に近い高井郡灰野村の屈強な人たちが牛に付け運んでいた塩荷物四十駄（約五千四百キログラム）を柏原宿の人々がその荷物を押収し柏原宿へ持ち帰ってしまったのです。

この押収事件を起こした中心は柏原宿本陣の中村六左衛門です。北国街道を敬遠して脇道である川東道を利用して「付通し」で北信濃から南に行くのは公道の「宿継ぎ」の原則を破るものでした。先ほど述べたようにこれは黙って見過ごすはできない事態でした。口銭収入が激減

して被害の大きかった柏原宿、古間、牟礼の隣り合う三宿が協議し、川東道の通行差し止めの訴訟を起こすことになりました。訴訟の推進役となつたのは柏原宿本陣の中村六左衛門です。

六左衛門に率いられた柏原の若者たちが灰野村の塩荷物を押収したのは訴訟のための証拠、「付通し」の証拠品を確保するためなのでした。

同じ年の閏八月、柏原以下三宿は、川東道は単なる山道に過ぎないのであり、「山道は付送せず」なのがルールであるから塩荷の付け送りを停止するようにと特に違反のひどかった灰野村、倉井村、黒川村の三村を、道路行政を管轄する幕府の道中奉行に訴えました。吟味はただちに評定所で行われることになりました。

評定所は勘定、南北町奉行、寺社の三奉行で構成され、訴訟裁定の実務は切れ味抜群の司法官僚であった評定所留役が担当します。村落どうしの争い自力救済が原則であった中世に比べればグンと法治国家の体をなしていますが、評定所に持ちこまれる訴訟の数が膨大でした。柏原宿らが訴え出した訴訟も最終的な結果が出るまでは足かけ九年かかりました。長い戦いとなつたのです。

#### 四

柏原宿ら三宿に訴えられた灰野村や倉

井村は利害の一致する周辺の村に呼びかけ、それに呼応して合わせて十七の村が共同して、この訴訟を受けて立つことになり、三宿対十七の村という北信濃全域を巻き込んだ訴訟となりました。

この時代、民事訴訟は幕府評定所で行われました。訴訟の双方は江戸の公事宿（くじやど）に常駐し、いかなる事情があろうとも当事者は多くは村役人が付き添い、吟味の場に出頭しなければなりません。しかも訴訟は長期にわたります。その間の江戸往復の路銀、公事宿の滞在費だけでも莫大な額に達しました。三宿対十七の村の財力と連帯の絆の強さの勝負でした。

三宿側は川東道という山道を使って「付通し」を相手方が行うことによつて宿駅の実収入の大半を占める塩荷の公認された通行口銭が激減して佐渡金山御用や大名の参勤交代に支障が出ている主張しました。これに対して十七の村からは我々はもともと貧窮の土地柄で農業の合間に自家の馬を使って味噌仕込み等に使う越後から塩を安く買ってくるために川東道を使っている。塩商売といつても零細な商いであり口銭をとられたらやつていけないと述べ、第一、川東道は野尻から代官所のある中野や飯山の城下に行く公道ではないか、とも述べました。

評定所は地理や物流の実態などを現地調査するなど、かなり慎重に審議を進め、一端は三宿の事実上敗訴となる決定を出

しましたが、それにもめげることなく柏原宿本陣の中村六左衛門は再び提訴をします。今回の切り札は先に述べた一六一一年のお墨付きです。

一八一三(文化十)年四月二十五日、再審の裁許が下されました。商い荷物はすべて三宿を宿継ぎして通行し口銭を納付すること、また、川東道を付け通す荷物は野尻宿で三宿分の口銭を納付すること、武家荷物はすべて三宿通行とし、百姓が自分使いの塩荷は川東道の通行は「よし」とすること。これが最終の裁定でした。

この訴訟に要した費用はもちろん自己負担でした。柏原宿本陣に残る史料から類推すると三宿での訴訟費用の合計は四百一両(現在の四〇一〇万円)ほどでした。敗訴した十七の村側の費用は四百九十五両(現在の四五〇万円)でした。江戸での訴訟は本場に高くついたのです。

## 五

さて、この訴訟の頃に江戸にいた一茶です。一茶がこの訴訟にどんな関わりを持っていたかは分かりません。訴訟の推進役であった柏原宿本陣の中村六左衛門利賓(なむらしるくさえもん)の兄である中村四郎兵衛利保(なむらしるくさえと)はともに入茶とは親しい俳人であり、利賓は観国、利保は桂国という俳号

をもっていました。この訴訟で特に奮闘したのは兄である中村四郎兵衛利保です。利保は始めから終わりまで江戸に滞在して三宿の陣営を指揮し、勝訴を勝ち取りました。彼は長男ながら妾腹であったため弟の利賓に六左衛門の家督を譲り、分家となって本陣を盛り立てました。一茶が江戸でよく接触したのは利保です。一茶は利保・利賓兄弟の父(俳号は新甫)に俳句の手ほどきを受け、幼いころより利保・利賓兄弟とは親しい間柄でした。一茶は一八〇八(文化五)年、祖母三十三回忌に帰郷した際に「桂国猫の作」という短文を作っています。

我が友桂国、一つの猫をめめて、  
夜は懐に暖め、昼は衾の上になで  
る。しかるに、ひたすら鳴きて止ま  
ず、ともすれば逃げ帰らんとす。あ  
る時、ワラもてあやしげなるツグラ  
といふ物を作りてあてがふに、やう  
やく気にや叶ひけん、いと心よげに  
すやすやと寝入りぬ。

早生藁(わさわさ)や

猫から先へ安堵顔

一茶自身も「猫の子がちよいと押さへる  
おち葉かな」「寝て起きて大あくびして  
猫の恋」といった猫の句を三百句以上残  
すほどの猫好きでした。猫好きというは  
気が合うといえますから、利保と一茶は

可なり親密につき合っていたと考えられます。しかも中村四郎兵衛利保は訴訟のためにずっと江戸にいたわけですから、二人の間では頻繁に行き来があったことでしょう。事実、一八一二(文化九)年八月十九日、江戸に出ている利保(桂国)が発病したときに、一茶は寝ずの看病をして国元に急報しました。二十九日は弟の中村六左衛門利賓(観国)と村役人が江戸にきています。柏原・江戸間はふつう七日はかかるのですが、驚くほど早い江戸への出府です。利保は病気が癒えた後、評定所の審理の大詰めに復帰しました。

中村四郎兵衛利保たち三宿の訴訟関係者が江戸で滞在した宿は両国橋近くで隅田川と神田川が合流する場所である浅草平右衛門町にあった公事宿の伊勢屋でした。この時代、評定所での裁定のために江戸に出てくる地方の人たちは評定所から指定された公事宿に居続けるのが常でした。もちろん宿泊費は自己負担です。史料によれば公事宿の一泊二食付きで一人二八〇文(現在の四五〇〇円ぐらい)。

これだけでは足りず昼食代(百文ぐらい)や内風呂が公事宿にはないので銭湯代(八文)、歯磨き粉代(十二文)などが必要でした。しめて一人四百文(現在の六千五百円ぐらい)ほどが一日の滞在費として必要でした。先ほども申し上げたように訴訟には大変な金銭的負担を要求されました。

お金の話はこれくらいにして一茶は利保が訴訟で奮闘しているとき隅田川の川向こう本所相生町に逗留していました。両国橋の東およそ一・五キロの場所です。一茶が利保に会おうとすれば二十分も歩けば会えたわけです。親しい友である利保が近くにいと知れば機会あることにあつていたことでしょう。

江戸での訴訟は長期化するのが通例で評定所の腰掛(奉行所や評定所で訴訟人の控えの場所)からの呼び出しが公事宿を通してかかるのは付きに二、三回程度でした。この間、帰郷することも宿をかえることもできませんでした。暇を持てあまして江戸の名所見物や芝居見物の出かけることはよくあることでした。

日記によれば一茶は四郎兵衛利保を誘って一八一(文化八)年三月十三日に巢鴨の植木見物に出かけています。同じ年の五月二十一日には北信濃にある戸隠神社の開帳に二人で出かけています。

そして、翌年の六月、一茶は帰郷し、本陣の中村六左衛門利賓宅で連泊しています。当主利賓に兄の四郎兵衛利保の近況を伝え、江戸訴訟の情報を話題にして歓談しています。一茶は数年前から進めつつあった柏原への帰郷のプランを実現すべく手を打っていたのです。

同じ年の年末に一茶は帰郷し岡右衛門の家を借りて柏原での定住を始めます。翌年、一八一三(文化十)年一月二十六日、一茶は弟専六(弥兵衛)から家産の



半分を相続する細目を決めた証文「熟読書付之事」を手に入れます。それまで渋っていた継母や弟専六と急転直下合意に達した背後には中村四郎兵衛利保・中村六左衛門利資の兄弟という柏原の有力者である二人がいたことは容易に推察できます。細かいことですが勝訴の土産をもって柏原に帰った四郎兵衛利保から七月八日に一茶は二両借用しています。このことは利保と一茶との親しい関係をうかがわせます。

一茶に二両貸してかしてから三ヶ月後の十月七日に中村四郎兵衛利保は亡くなります。享年六十一歳でした。

北信濃をゆるがし柏原宿の命運を占った訴訟騒ぎは一茶が江戸を離れ柏原に帰住を考へはじめ、ついに実現した時期と重なります。江戸の公事宿には四郎兵衛利保は常駐していますが、残りの人は当番制で柏原宿から期限付きで派遣され、公事宿に詰め、いつ来るか分からない評定所腰掛への呼び出しにそなえていました。公事宿の伊勢屋に行けば故郷の情報が得られ、故郷の有力者にいろいろと相談もできる。一茶が苦しい江戸での暮らしの中で得た生活力はまことにたくましいものでありました。

## 隠された歴史(67)

満田 正賢

前回から、今まで考察してきた内容の修正、または補足をしています。今回は「邪馬台国と火の国」の内容の修正を行いました。今回はそれに続き、魏志倭人伝に記された距離に関する考察を深めたいと思います。

魏志倭人伝の記述をいい加減なものとする論者の根拠の一つは、魏志倭人伝に記載された距離でははるかに日本を越えてしまうということです。畿内説では方角の「南」は「東」であるという解釈を付け加え、距離的にも適合しない大和を邪馬台国に比定します。したがって魏志倭人伝に記述された距離も方角もすべてが正しいと考えるためには、そこに記載された「里」が後述する七六〇七七mの「短里」であったという前提が必要になります。

まず、前回ご紹介した東京都立大学名誉教授の野上道男氏の仮説について触れます。野上氏は日本測量学の権威ですが、七六〇七七mの「短里」の存在を証明し古田武彦氏の邪馬台国九州説を裏付けた谷本茂氏の論文「中国最古の天文算術書『周髀算経(しゅうひさんけい)』之事」を高く評価しています。そして新たな発想として、周髀の影の測定によって邪馬台国の位置の特定を試みています。その

結果、魏志倭人伝に記された「自郡至女王國、萬二千餘里」は帯方郡から卑弥呼の出身地である女王國までの距離を示しており、測量学の観点で見れば女王國は宮崎県南部であろうと推定しました。野上説の主旨は以下のとおりです。

① 魏志倭人伝の「郡から狗邪韓国は七千里」「邪馬台国は東南一万二千里」と記述されている。郡から倭へ派遣された魏使は朝鮮半島の西岸と南岸の複雑な海岸線を回ってジグザグに水行(沿岸航法)して狗邪韓国に至っている。当時は海図がなかったのだから航路の長さは測れない。あきらかに「七千里」は測量値である。ほかに測量方法がないことから、この値は「一寸千里法」による測量値である。

② 「一万二千里」は魏使の行程距離であるわけがなく、唯一の選択肢として、天文測量による成果であることは自明である。しかし、驚くべきことに、ほとんど全ての歴史家は、帯方郡から人が移動したその海陸行程「東南一万二千里」のところに邪馬台国が存在していたと思ひ込んでいます。史書に数値があっても、その数値をどうやって得たか(測量法)に全く思いを致していないようである。

③ 「東南一万二千里」という測量結果から、邪馬台国は宮崎平野南部に、誤差を考慮しても南九州に、存在し

たといえる。同じく「狗邪韓国」は巨済島付近である。日影長を測るには誰かが夏至のころそこに居なければならぬ。遣倭魏使団の誰かが倭女王卑弥呼の出身国邪馬台国まで旅行し、一万二千里という距離の根拠となる日影長を観測したのであろう。④ 魏志倭人伝は、その著者と想定読者(朝廷百官)の測量法に関する共通の素養を前提に読まれるべきである。現代の我々は「周髀算経」の「一寸千里法」という天文測量法を正しく理解することによってのみ、邪馬台国(所在地)を知ることができるのである。

野上氏の仮説に関して補足しますと、周髀算経では、天は円く広げられた傘のようであり、地は方形の碁盤のようであると、天蓋説(周髀説)を用いて天と地の関係を説明しています。皆さん、馴染みのあるメルカトル図法で作られた地図を想像してください。球面を平面に置き換えていますから、北極や南極付近が赤道付近に比べて異常に大きい地図が出来あがっています。

北回歸線の北側の地域においては、棒の日影は午前中西北に延び、南中時(午後零時)に真北になり、午後は東北に延びます。その長さの比は緯度の差になります。それでは東西に離れている二か所の日影長についてはどうでしょうか。そこでポイントとなるのは「夏至南中時」

に棒の長さを測るといふ手法です。その場合経度（地図上の東西）の違いは無視できません。なぜなら経度の異なる二か所の測定は同一時刻に行われていないからです。即ち二か所における「夏至南中時」は時差を伴っているのです。

ですから「夏至南中時に周髀（八尺の棒）の日影長を測定してその差によって緯度差を測る」といふ手法は、二千年以上前の中国周代で用いられた、驚くべき程正確な緯度差の測定法なのです。

緯度差がわかれば、方位を加味して三角法により斜めの長さ、すなわち実際の距離を測定することは理論上可能です。但し、周髀算経には東西のずれ、すなわち方位を加味して実際の距離を測るといふ手法は記されていません。ここが、野上説があくまで仮説である理由です。しかし、三角法は当時すでに知られており、二世紀頃の算術書である「海島算経」では、平面距離と角度によって山の高さを知る手法が紹介されています。

それでは、野上氏が推定した邪馬台国の位置は正しいのでしょうか。野上氏は日影長の測定以外にほかに測量方法がないとしています。が、「短里」自体は歩測による実測値から生まれたものです。今までの古田史学での研究によれば、短里を導く一歩はいわゆる歩幅ではなく足裏の長さ（二十五～二十六c.m）であり、三百歩が一里（七十五～七十八m）です。

（\*いわゆる長里は一歩を歩幅にしたもので、短里の約三倍です。一里は短里と同じく三百歩です。）

「一寸千里の法」はたまたま夏至南中に測定した周髀の日影長の一寸の影の差が千里に相当するという偶然から生まれたものです。日影長の一寸の差を示す距離を千里と定めたというものではありません。魏志倭人伝に記された里数の一部は歩測または移動時間による里数換算値と考えられます。その中で、距離が長く歩測が出来ない七千里と一万二千里に關して言えば日影長の測量によって得られたものではないか、と限定的に考えるべきと考えます。

又、野上氏の距離計算は、現代の測量技術と現代において入手可能な地図の知識を基にしたものです。南北の距離（緯度差）については、周髀の日影長の測定によって近似値は得られますが、東西の経度差は南北の緯度差に比較して微小なものであり、正確に測定できたとは思えません。なにより野上氏自身が、古代における方位の特定は八方位（北、東北、東、東南、南、西南、西、西北）であったと述べています。

野上氏の実際の計算方法を見てみると、野上氏は、(3:4:5△形)といわゆるピタゴラス三角形)の方位(約三十七度)を選択して、宮崎市の位置を特定しています。その選択には、現在入手できる九州地図が念頭にあったからとしか

思えません。しかし、魏志倭人伝には東南という方位しか記されていないのですから、東南の中心線の方位(四十五度)を選択するべきであると考えます。

魏の使者は女王国において夏至南中時の周髀の影の測定を行い帯方郡との緯度差を知りました。そして東南方位の中心線(四十五度)を加味して萬二千餘里という距離を特定しました。地図上での女王国の位置とは大きく東にずれています。が、東西方位四十五度の線を用いて緯度の計算をした場合、女王国の位置は菊池平野の少し先になります。魏志倭人伝の記述から私が推定した女王国の位置(八代近辺との矛盾は生じないと考えます。

なお、ここまでの考察を古田史学の会関西例会で発表した後で、古田史学の会会員の大原重雄さんが、橋本吉治氏の「三国志倭人傳『邪馬壹国女王都』を計測する―周髀算経の影寸千里を検証 方角も距離も正しかった海島算経を図解―」という本の存在を教えてくださいました。この本は二〇二〇年一〇月に発刊されていますが、二〇二五年正月付の「はじめに」の文章が載っていますので、二〇一五年一月の野中道男氏の記念講演に少し先行している形にはなっています。

橋本氏は一級建築士の資格を持つプロの建築家・測量のプロのようです。そして私と同じく四十年前に古田武彦氏の「邪馬台国はなかった」に魅せられて、

ライフワークとして邪馬壹国の場所探しを始めたようです。

橋本氏の邪馬壹国探しの方法は野上氏とほぼ同じです。但し野上氏の講演内容に比べるといくつかの特色があります。

第一に、橋本氏は自分で東京と大阪で夏至南中時の日影長の測定をして、その南北方向の差(緯度差)を九九・三%の誤差で検証していることです。

第二に、橋本氏は私が野上氏の説に対し批判的に採用した東南の方位(四十五度)を用いて女王の都を推定していることです。即ち日影長の差による緯度差に東南の方位を加えて女王国の推定をしたのは、私が最初ではなかったということになります。

第三にその結果として橋本氏は、帯方郡から七千餘里離れた狗邪韓国を韓国金海(キメ)市、一万二千餘里離れた女王国を宮崎県高千穂町の岩戸神社近辺に比定しています。

野上氏は帯方郡からの方位を(3:4:5△形)ピタゴラス三角形)の方位(約三十七度)と想定して、狗邪韓国を韓国南岸地域の巨済島に比定しました。これに対し私や橋本氏のように方位を四十五度と想定すると、比定地は緯度的に北にずれません。その結果が金海市を通る線になるわけですが、金海市は古代加羅国(金伽耶国)の故地であり、弥生式土器が発掘されるなど倭国との交流が実証されていることから、狗邪韓国を金海市に比

定する方が、妥当性があると思います。  
橋本氏は女王の都を宮崎県高千穂町の  
岩戸神社近辺に比定しています。それは  
宮崎県高千穂溪谷のもつ神秘性と天照大  
神にまつわる神話にその回答を求めたと  
思われます。この東南四十五度を加味し  
た一万二千里の線は八代近辺も同様に指  
しています。私は橋本氏の推定を頭から  
否定するつもりはありませんが、いまま  
で私が検討してきた三国志魏志倭人伝の  
文章から読み取った女王の都の推定位置  
と測量学のプロが推定した帯方郡から一  
万二千餘里の位置が一致することは重要  
ではないかと考えています。

## ◇十二ページからの続きです。

養かんぢえ雑衣をつけて入山された

それを使うと

アメリカとソ連とが

水爆を捨てない限り

世界は平和にならないし

人類はいつも戦争の恐怖にさらされ

やがては地球最大の危機がやってくる

捨こそ世界平和の鍵である

東洋の文芸、わけても日本芸道の特徴

は、捨である。茶道も華道も、短歌も俳

句も、究極は「捨」の一手である。

「短歌も俳句も」は、私に言わせれば

「短歌も俳句も川柳も」であるが、「捨

の思想を今風手軽に「断捨離」などと

い捨てていいはずはなからうと、あらた

めて思い知った次第である。

## 俳句

影山 武司

石仏の頭の傾ぎ木瓜の花

雛菊の照らす隘路や薬師堂

銀紙を剥いて春日の零れけり

浄土へと攫れ行けり花吹雪

喪の家の庭にも花の盛りかな

花散らしの風に吹かるる喪の衣

雉鳴くや曲輪へ続く登り道

松の花岬ぐるりと巡行船

春の月乙女座宮に迷ひ入り

反戦のフオークを今に昭和の日

## 編集後記

SK生

▲口にしたくもないことだが、古稀を越  
えると何かと体の障りが出てくる。髪は  
白くなる。それどころか杜甫が櫛もさせ  
ぬと嘆いたように髪も薄くなる。目は老  
眼、おまけに夜はよく目が覚め、筋肉の

疲れが取れにくくなる。「ああ」と思わず  
ためいきが出る。▲宋代の詩人范成大は

ひどい耳鳴りに悩まされたらしい。「歴  
何よりてか起こる 冷冷 耳と謀る」。  
ジージーと鳴る音はどこからくるのか、  
リンリンとたえず耳に相談してくる、と  
詩人は訴える。これをどう乗り越えるの  
か。遠くから響く楽器の音、秋になくヒ  
グラシの声にと耳鳴りを見立てて、六根  
清浄、六根清浄と唱えて苦痛をしのぐの  
だと詩人はいう。▲ユーモアさえ感じる  
苦痛解消法だ。不幸な状態、苦痛に満ち  
た状況を乗り越える最高の方法は笑いな  
のだともいう。泣くのはイヤだ、笑つち  
やおう、と小生も思いたいが、なかなか  
笑えない。遠くはウクライナ、ガザでの  
戦闘、近くでは連日の物価高。暗い気分  
になるばかりだ。▲小生の好きな川柳に  
「人の世や『嗚呼(ああ)』にはじまる広  
辞苑」という橋高薫風の句がある。まこ  
とに人の世には『ああ』という言葉が満  
ちている。歓喜、絶望、いずれであつて  
も人は「ああ」という。今は悲嘆の声が  
多いに違いない。まさに「ああ」の世  
である。神仏のいる天は高く、地に満つ  
るは悪政ばかり。いつになったら、五  
月の陽光を眺めつつ考えるのはそんなこ  
とばかりだ。出てくる言葉は「ああー」  
である。▲なお最後に一言。「広辞苑」の  
最初にある言葉は「あ」である。これは  
念のため。



京都府立植物園のバラ園にて

「方円に従う水になれぬ春」であったが、一方では、「一瞬が永遠になる春である」とも思う春であった。想いは十七音字の中を駆け巡る。

別れようザクっとキャベツ切る様に

告発が点から線へ山動く

笑美

1句目。詠み込めば十七音字は大河小説に匹敵する。そう言えば、こんな句もあつたなあ。

喪があける一気に鯖の首はねる

美致代

どんな物語も「一気に」五七五に詠み込まれ、読む者を圧倒する。

2句目。これは、一強政治の闇を象徴するような「ウラ金」問題を告発する句だろうか。山が動くかどうか、主権者次第であるが。

幾山河越えて素肌も強くなり

秋子

人生百年、生きてきた道のりは、「本論はこれから」と言う百の皺」に刻まれている。もう怖いものはないのだ。

九条が自慢だったよねエ日本

正彦

「九条の文化力よりトマホーク」だと考えているこの国は、誰とどこへ行くつもりなのだろう。

一人居て時に孤独な風が吹く

喜代志

半世紀も昔のこと、友人の結婚式で新婦に向かつて、「私の友人である新郎は、テレビが無くて一人部屋にいて遊べる、世話の焼けない男ですからどうぞご安心を」という祝辞を聞いたことがある。あれはほめ言葉だったと、今ならわかる。「何もせず部屋に一人でいる男」を不思議と思うか、「文化とは孤独に耐えている力」と思うか。勝手なことだが、そんなことを思い出しながら、この句の作者の心に思いを致した。

寝て待てと言うが果報は飲んで待つ

南北

古来詩人はみな、酒は飲めるうちに飲め、と言った。酒はエネルギーの塊。米も麦も芋も、そのエネルギーの九割以上が酒に詰ったままだ。私も、「百薬の長に白寿と書いて飲む」のだ。

ウルトラマンはまだか地球が虫の息

修一

フリードリッヒ・エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』を出版したのは一八四五年（ドイツ語版）。一八〇年後の今も労働者階級の問題は基本的に解決されていないが、地球における自然環境の問題もまた深刻さを増している。自然環境問題が騒がれた出した頃、私は、「念ずれば花ひらく」と言っ

た坂村真民の詩の次の一節に驚いたことがあつた。繁栄のために滅ぶのか、と

・・・

歴史を見てみるがよい

民族も国家も個人も

みな繁栄のために滅んでいる

持たなくてよいものを

持ったがゆえに自滅した

・・・

これは、改めて調べてみると、真民の以下の記述からの抜粋であつた（坂村真民、『随筆集 念ずれば花ひらく』（復刊版）、二〇〇二年、サンマーク出版）。なお、

熊本に生まれた真民は戦後朝鮮から引き揚げ、やがて四国山脈の麓にあるわが故郷・愛媛県砥部町に住み名譽町民となつた。

一代の聖教みな尽きて

南無阿弥陀仏になり果てぬ

これほど一遍その人を表しているものはない。これは死ぬ十三日前、所持のすべての書籍などを自ら焼き捨てていわれた言葉であつて、わたしが一遍に心ひかれてならないのは、こういうところである。・・・

捨は

空といつてもよい  
無といつてもよい

菩薩の若さ

菩薩の美しさ

みなそれは

空からきている

無からきている

捨からきている

また捨は

まかせることである

木が美しいのも

花が匂うのも

この捨からきている

歴史を見てみるがよい  
民族も国家も個人も  
みな繁栄のために滅んでいる  
持たなくてよいものを  
持ったがゆえに自滅した  
わたくしが世尊の教えに

心ひかれるのは

捨の実践者だからである

国を捨て

位を捨て

妻を捨て

子を捨て

己を捨て

◇以下の部分は十一ページにあります。